

## 気象界消息

1. グッドマン氏来日  
オーストラリア気象局の測器主任 G.S. Goodman 氏は10月24日、メルボルン大学・気象局共用のレーダー（10 cm 波）の検収のため来日した。製作は三菱電機。
2. 荒川・今井両博士ニュージーランドへ  
ハリケーンセミナーに出席するため、10月31日、荒川秀俊・今井一郎の両氏はニュージーランド・オークランドに向け出発、11月16日帰国した。
3. 寺田博士 ローマへ  
長官付寺田一彦氏は家族同伴で、約2年間の滞在を予定しているローマへ11月4日出発した。国連WMO関係業務のため。
4. ホルツ氏来日  
アンカレジの気象台長、H. Foltz 氏は11月8日に来日した。慣熟飛行のため。
5. 大谷和夫氏渡比  
レーダー指導のため、名古屋地方気象台の大谷和夫氏は、11月9日3カ月の予定でマニラに向け出発した。
6. コロンボ計画研修生  
インド気象台の測器部 (Poona) の気象技術者スリバスタバ (G.P.Srivastava) 及びフィリピン気象局のタバング (Tapang) . コンティ (Conti) の両気象技術者がコロンボ計画による研修のため来日した。約6カ月間、スリバスタバ氏は高層測器及びレーダー等電子工学関係測器、タバング氏は航空気象、レーダー気象、コンティ氏はレーダー機器について研修する。
7. 津波警報  
10月13日、気象庁ではエトロフ沖地震によって津波のおそれがあると警報した。しかし幸にも津波は小さかったため被害は海苔その他の沿岸漁業に多少の損害を与え

たととどまった。なお洋波警報はハワイでもだされ、住民が退避した。

8. 秋田、豪雨  
10月15日、秋田県南部地方に集中豪雨があり、191戸が浸水の憂き目にあった。
9. 台風二つ  
硫黄島の南西700mbに台風19号が、マーカス島の西北西300kmに台風20号が、10月18日にあらわれたがいずれも日本へ直接影響せず去った。
10. 大山に雪  
10月18日に中国地方の名山、大山に今冬初の冠雪があった。例年にくらべて4日おそい冠雪という。
11. 北米にハリケーン  
大西洋に発生した今年7号目のハリケーンが、ノースカロライナからバージニアの沖をとおりぬけた。被害はなかったとのこと。
12. ブラジルと西イランに洪水  
10月17日、ブラジル南部で、10月24日、西イランでそれぞれ大雨のため洪水がおこったとのこと。
13. 初冬の風、吹きあれる  
11月8日夜から9日朝にかけて、日本全国にわたって今冬、初めての季節風が吹きあれ、各地で被害をだした。  
新潟では高波にさらわれた人があり、6隻の船が流失し、青森県のリンゴの被害は6千万円にのぼったといわれる。
14. 桜島の爆発  
10月中の桜島の噴火は219回にもものぼったと報じられている。

### 中国学術代表团招聘準備状況について

#### 日中学術交流委員会報告

1955年秋、郭沫若氏を団長とする学術代表团を迎えて以来、久し振りに中国学術代表团の来日が決まりました。今回の学術代表团の構成は、自然科学では気象、物理、社会、人文科学では古代史、近代史、考古学、文学、言語教育、現代中国の諸分野の者各1名、それに随員、通訳を加えた約10名からなる総合的な学術代表团で、東京、関東をはじめ各地の学術中心地を訪問することにな

っています。気象学会では、これら諸分野と協調し今回の中国学術代表团を迎えるに十分な準備体制を整え学術交流を内容あるものとするため、気象学会に日中学術委員会を正式に結成しその準備にあっております。翻ってわが国と中国気象界の関係をみますと、1954年10月、前和達気象庁長官の訪中、1957年2月、塗長望気象局長、道九章地球物理研究所長の来日、続いて気象学会からは、1957年6月、佐貫、岸保、毛利の諸氏の訪中、1960年11月には神山氏が日中友好協会の訪中使節団の一員として訪中され手厚いもてなしを受けております。また1957年

塗長望気象局長の来日を機に、1957年5月から中国の気象資料を入手することが出来るようになったことは、われわれの記憶に新たなことと思います。その後1962年の気象学会総会で中国より学術使節団2名を約10日の日程で招待することを決議し来日を要請しましたが、日中両国間の政情の変化に伴い、1962年7月中国気象学会より招待の時期を延期してほしい旨連絡がありました。一方諸学界と中国との学術交流も、1955年秋に学術代表団を迎え日中間の学術交流も円滑に行われてゆくと思われましたが、その後日中間の交流を阻害する情勢は悪化し、諸学界ならびに日中両国民の強い要望にかかわらず両者の学術交流の道はほとんど断ち切られて来ましたが、しかし一昨年10月以来中国学術団招請の運動が関西の学術研究者の間に起り、また関東では昨年秋より日中友好協会を中心にこの運動が進み次第に全国的な運動に発展しました。本年1月には、日中友好協会と中国人民対外文化協会との間に「1963年度日中両国人民間の友好交流の実施に関する議定書」が調印され、この中に中国学術団の日本招請を実現させる取り決めが行われました。その後関東関西双方の連絡のもとに中国学術代表団招請の具体化が進展し、中国側から11月に張友漁氏を団長とする8分野10名からなる総合的学術代表団を派遣する旨過般訪中した日中友好協会学習活動家代表団に伝えられ、気象部門の学者1名の来日も決定しました。しかしその後来日する学者の過半の氏名は発表されませんでした。昨日気象部門の学者は顧震潮氏(中国地球物理学研究所気象担当教授)である由内報が届きました。氏はかつてRossbyのもとで仕事をされたことのある気象力学を専門とする学者ですが、気象事業全般にも通じ現在中国気象界の第一線で活躍されている方です。

今回の中国学術代表団の訪日予定を過般「天気」その他で11月上旬とお知らせしましたが、11月上旬に北京では人民代表大会があり、このため訪日は11月下旬に繰り下げてほしい旨連絡がありました。このため今秋東京で開催される気象学会昭和38年度秋季大会中に予定していた中国記念講演会は中止され、来日の際に別に機会をもうけ記念講演会が持たれる予定です。

同氏の来日中の日程は下記の通りです。

12月1日仙台

〃 3～8日東京

〃 9～10日名古屋

〃 12～19日関西

〃 21～22日広島

〃 23日 山口

〃 24日 福岡

## 顧震潮氏について

顧震潮(Koo Chen-chao)は現在、中国科学院地球物理研究所気象学担当教授で、年齢は40年代(50才未満)と推定される。中国の清華大学を卒業し、直ちに気象界で活躍をしている。中国の気象雑誌「気象学報」で最初に発表したのは、大陸性の規準についてである(1943年)。その後、突風頻度や気象要素の変動研究、低気圧の各種性質、気象力学とそれに伴う数値予報の研究、天気予報の統計的評価法、ラジオゾンデの空益やゾンデ観測の調査、量的予報や蒸発問題、雲と降水に関する物理学や人工降雨についての研究といったもので、その専門分野は極めて多彩である。特に、数値予報ではキーベル学校、チャーニー派の発展に務め、2～3パラメータのモデルや3層モデルの数値予報を扱っている。その他乱れの問題をも取り入れて数値予報の発展がはかられている。中国独特の問題であるチベット高原がシノプチックプロセスに及ぼす影響の研究では、ベンガル地方の偏西風南方分岐にあるトラフで、東チベットに暖気移流を起させ、そこに大気不安定の積乱雲を生ずることを論じている。

シノプチックの方では中国の寒波問題を論じ、これにはムルタノフスキー学派に属する方法を用い、ベースを用いて天気現象の予報をしている。

最近では雲や降水の現象に関する研究が多く、暖かい雲における雨滴の成長や上昇気流の変動や重力による雨滴の併合、及びこれの応用研究になる人工降雨へ研究をすすめている。

国際会議や国内会議にも出席していて、第8回 IUGG(国際測地・地球物理連合)(1948年?)、第1回国際数値予報会議(1952年、ストックホルム)に中国代表として出席、その他、共産圏科学者大会に訪ソしている。1958年10月に蘭州で全中国気象会議が開かれ、人工降雨についてのべ、最近では1962年8月、北京での中国気象学会創立38年を祝い、雲物理の観測と中国の雲物理学について、講演を行つている。

顧震潮は曾て、ストックホルムに外遊し、ロスビーのもとで理論気象学についての研究をしていた。英語、ロシア語には堪能なこともつけくわえておく。

(当舎記)